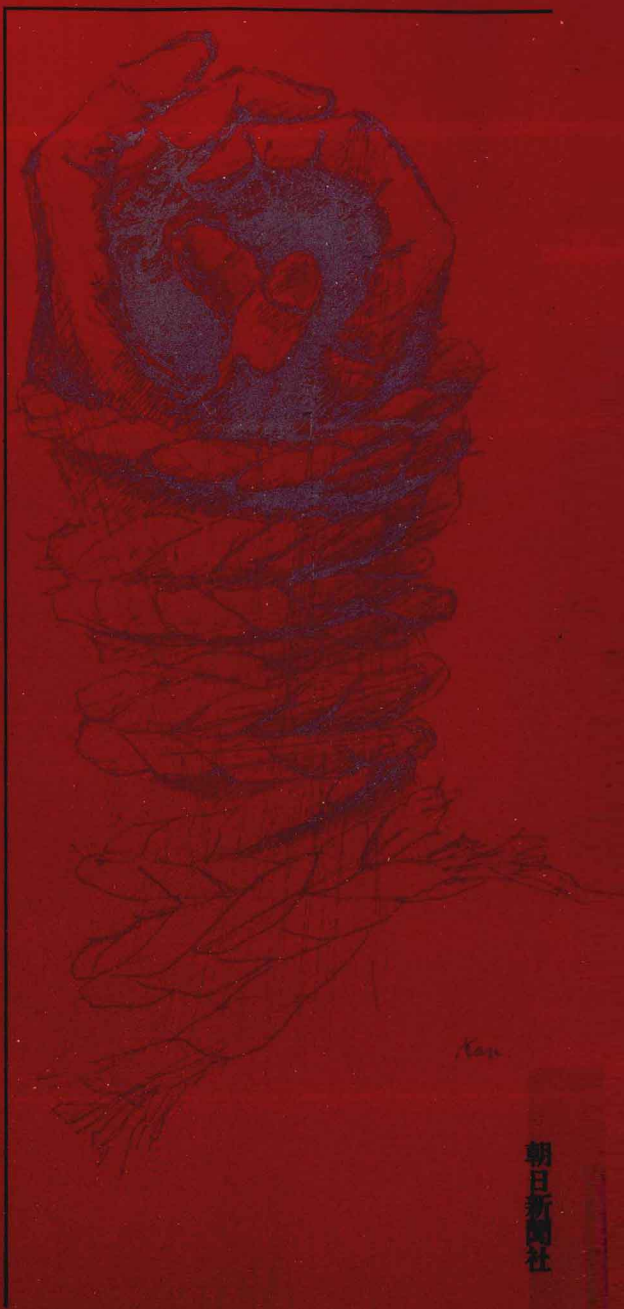




小説佐久間象山

杏花爛漫

上卷

井出孫六

杏花爛漫

〈小説 佐久間象山〉

上卷

井出孫六



朝日新聞社

杏花爛漫 小説佐久間象山 上

一九八三年十月二十八日第一刷発行
一九八四年一月三十一日第二刷発行

定価 一三〇〇円

著者 井出孫六

発行者 初山有恒

発行所 朝日新聞社

〒114 東京都中央区築地五―三―一

電話 〇三―五四五―〇二三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇一七三〇

印刷所 図書印刷株式会社

Printed in Japan 0093-25154-0042

© Magoroku Ide 1983

目次

序章	黒船出航	3
第二章	海防の修羅	55
第三章	策謀の夏	131
第四章	二つの出会い	195
第五章	^{あした} 晨の鐘	287

装画	櫻井 寛
装幀	熊谷博人

杏花爛漫
小說 佐久間象山
上

序章 黒船出航

(一)

岸壁のステージに整列した海軍軍楽隊が、フォスターの曲をつぎつぎに奏^{かな}でた。最後に「ヘイル・コロンビア」のメロディがひととき高まっていったとき、どよもす歓呼のなかを、旗艦ミシシッピー一、六九二トンの船体がゆっくりと第一埠頭^{フアースト・ピア}をはなれていく。

岸壁の人波の中央に、大統領フィルモアと海軍長官ケネディが、連邦政府の高官たちを従え、笑みをたたえて、シルクハットを高々とうちふっている姿が目をひいた。

新任の東印度艦隊司令長官マシュー・カルブレイス・ペリーが、二百六十余年のあいだ固く扉をとざしたまま、神秘の沈黙を守っている極東の島国日本に向けてアナポリスの港を鹿島発ちしたのは、一八五二年十一月八日のことだ。極東の島国の時計は、そのメカニズムは同じでも、まるでべつな時をきざんでいた。その暦におきかえれば、嘉永五年九月二十九日ということになる。

チェサピーク湾の水の面は、晩秋の陽をうけて鏡のように白く輝いていた。ミシシッピー号は快調な船足で、やがて水平線の彼方に玩具^{おもちゃ}の船のように小さくなっていく。

アナポリスの街角にプラタナスの枯葉が舞っていた。ドラッグ・ストアの店頭では、いま一冊の分

厚い小説本が大層な売れ行きをしめていた。ハーマン・メルヴィルという耳馴れぬ新人の『モービー・ディック』という小説なのだが、それはまるで鯨の百科事典ではあるまいかと思うほど、古今東西の鯨に関する記述がくり広げられ、異教の經典のような呪文が並べられており、敬虔なクエーカー教徒は眉をひそめたけれど、なぜか読書界の話題をさらっていた。

主人公はイシュメールという捕鯨船の若い船乗りで、イシュメールの口からとびだすかぎりない饒舌^{ぜつ}は、気短かなヤンキーには、鼻もちならぬ銜学趣味^{ベンチシズメ}ともみえたが、鯨と捕鯨に憑かれたようなその熱っぽくも退屈な文字の行進のはてに浮かび上ってくるもうひとりの主人公エイハブ船長とその仇敵^{キリディ・ディック}白鯨^{アイツグ}の魔性に、読者はいつのまにかからめとられた虜^{とりこ}となってしまうのだった。

そういえば、テキサスの石油がまだ「黒い水」でしかなかった時代、アメリカの東部の町々の夜は、鯨の油で照らされていたのだ。機械という機械は鯨油を潤滑油として動いてもいた。そればかりではない。ロンドンの宮廷やパリの社交界の女たちの優雅な腰のふくらみを飾りたてるあのコルセットに、鯨のヒゲはなくてはかなわぬものであり、鯨のヒゲは荒くれ男のヤンキーの懷ろを富ませていたことも忘れてはならない。

まこと、鯨なくして東部十三州の独立は支えきれなかったと言う人がいるほどだが、物言わぬ鯨がどのようなものであり、その鯨はどんな残酷な方法で追われ捕われているのか、いま、ひとりの無名の小説家によって、ヤンキーの眼前にあますところなくつきつけられたのだった。

片脚を白鯨にもぎとられたゆえに、一頭の白い鯨の姿を求めて印度洋から南太平洋そしてカムチャツカの沖合いまで荒波にもまれながら船をすすめていく老船長エイハブの後姿に、ヤンキーたちは己^{おの}が姿を見てとった。その不気味な妖気と不屈な意思をたたえたエイハブ船長の横顔に、ふと、新任の東印度艦隊司令長官ベリーのそれが一瞬だぶったものとなって映るのだと、読後の感想をもらす「ア

ナポリスっ子”もいた。

マシュー・カルブレイス・ペリー、五十八歳、やがて間もなく退役の時をひかえ、安穩で豊かな別荘生活を享受できるはずの老提督が、いまなぜ、この困難な航海に上らなければならぬのか。アナポリスの酒場では、それがもっぱらの話題となった。じっさい、老提督はいまをさる四年前、メキシコ湾艦隊司令長官として、剛勇を発揮し、ベラクルスの困難な激戦を勝ちぬき、メキシコからカリフォルニアを割譲させた最大の功労者として、国民的英雄の名を勝ちえた。

合衆国が領有を宣言する一週間前に、カリフォルニア大金鉱が発見されていたことを思えば、あれはまるで有史以来最大の強盗というものではなかったろうか。そのとき、ロンドンの亡命先でドイツの青年が「共産党宣言」というパンフレットをだしたことなどくそくらえと、幾万の黄金探索者たちはカリフォルニアの金鉱へと殺到した。

へさてアメリカだ。この国に生じた最も重大な、二月革命よりもっと重大な事実、カリフォルニア金鉱の発見である。発見後、せいぜい十八カ月の今日、既にこれが、「アメリカの発見」そのものよりも、遙かに大規模な結果をもたらすだろうことを思わせる。

と、その若い亡命者が一八五〇年に新聞に書いたそうだ。

「おっしゃる通りさ、おれたちはいま、その歴史的瞬間のまっただなかに生きてるってもんさ。それにもなにも、マシュー・カルブレイス・ペリー提督のおかげなんだぜ」

酒焼けの赤鼻をうごめかして仕立屋の旦那が言うと、負けじとビール樽のような腹をつきだして粉屋のトムが応じた。

「大したもんさ。ミシシッピの司令塔には、カリフォルニアの金塊が数十万ドル分も積みこまれたってじゃないか。マシューのあの礼装の胸飾りも純金だったぜ」

「いいとも、われらの英雄に栄光あれだ。フィルモアが、大統領選もそっちのけで見送りにかけつけてきたものね。ともかく、大したものだったよ、ミッシッピの鹿島発ちは」

だが、さっきからカウンターの端で浮かぬ顔でバーボンをちびちびなめていた若い銀行員が、酒場の興奮に水をひっかけた。

「なに、あれはフィルモアの選挙運動ですよ。捕鯨業者の票と鯨大尽の懐ろが目あてなんですよ」

「なにを、この民主党め！」

つかみかかろうとする仕立屋の赤っ面の鼻先に、若い銀行員がつきつけた書類には、つぎのような数字が載っていた。

米国捕鯨船トン数

年度	トン 数
1820	36,445
1830	39,705
1835	97,649
1840	136,927
1844	200,147
1845	218,655
1846	233,262
1850	171,484

「この統計表をとくとごらんなさい。一八二〇年にわずか三万六千トンだった合衆国の捕鯨船団が、四分の一世紀のあいだに、約七倍にふえて、一八四六年には二十三万トンにふくれあがったんだ。そのあいだに、イスパニヤやオランダはむろんのこと、フランスの捕鯨までもノックアウトして、大英帝国の捕鯨船と血みどろの闘いを、七つの海でやってのけたってわけですよ。ところが、どうです。世界の王座につこうとした合衆国の捕鯨船のトン数が一八五〇年には十七万トン台に落ちてきた。このまま放っておけば、わが合衆国の捕鯨は地獄に堕ちてしまふんじゃないか」

若い銀行員は、ここで一息つくと、まるで大学教授が学生に講義でもするように、並みいる酒呑みたちを前にしてこうつづけた。

「こんなに急に堕ちこんだのは、ひとつには、かのメルヴィルがいみじくも描いたように、奴隸船、海賊船まがいの捕鯨が行なわれたからだ、もうひとつ見落せないのは、若ものが捕鯨船に乗りたがらなくなったからです。なぜか？」

バーボンを含んで舌を滑らかにしたあと、彼はさらにつづける。

「大西洋も印度洋も、抹香鯨は獲りつくしてしまった。いまや主戦場は、北太平洋の日本近海に移っているんです。黒潮と親潮のぶつかりあうその荒々しい漁場では、難破しない方が不思議なくらいだ。ところが、難破船の漂着者が日本につくと、なぶり殺されたり、牢獄に閉じこめられてしまいうらしいのです。船乗りたちが北太平洋を敬遠するのは当り前だ。それもこれも、合衆国政府がジャップの暴虐を放置しているからだ、ロングアイランドやナンタケットの鯨お大衆はフィルモアに陳情したってわけですよ。野蛮な鎖国を解かせよ！」と

「いよう、お若い、顔に似あわず勉強しとるじゃないか」

気のいい赤鼻の仕立屋が、こう引きとることで、その場はおさまり、酒場にはまた、もとの喧騒がたちかえった。

「ともあれ、われらが提督の航海の前途に幸あれ！」

乾杯、乾杯、乾杯と、アナポリスの秋の夜は更けていった。

(二)

アナポリスをあとにしてチェサピーク湾を南下したミシシッピー号は、いったんノーフォーク軍港

に停泊した。ここで東印度艦隊が編成される手筈になっていたのだが、幾つもの障害が重なった。たとえば同行予定の新鋭艦プリンストン号の蒸気関はとても極東までの長旅に耐えられるものでないことなども判明した。

——ぐずぐずしていることに倦きた提督は、最早僚艦を待とうとの意がなく、よって一八五二年十一月二十四日にミシシッピー号のみがノーフォークを出発し、石炭と飲食物の供給上外廻り航路をとってマデイラ、喜望峰、マウリシアス及びシンガポールを経由せんと意図を抱きつつ日本に使したのである。（『ペリー提督日本遠征記』）——

ペリー提督のいらだちが伝わってくるくだりだが、その背後には、ロシアがブチャーチン提督の日本派遣を決定したというニュースが入っていたからだ。すでに一刻の猶予ものこされてはいないという切迫感が、ミシシッピー号の単独航海につながっているといつてよいだろう。

チェサピーク岬をまわって大西洋に出るや、「十日間、風は南方から強く吹き、次いで北北東に変わって海を荒れ狂わしめた。次いで西方に方向を変えて狂い吹き、船は不愉快に弄ばれる有様であった」とその航海日誌は語っている。ノーフォークを出港して十七日、ようやく北緯三十三度西経十七度の海上に、最初の寄港地マデイラ諸島の鳥影を認めた。依然波は高かったが、玄武岩の島には美しい白亜の建物が並び、豊かな葡萄畑が広がっている。何よりもまず、マデイラ産の葡萄酒を積みこまねばならぬ。それに、ケープタウンまでの水と石炭と肉だ。積荷のあいまをぬって、ペリーは海軍卿ケネディに宛て、長い書簡を書いた。

——卿よ。合衆国出発以来、余は、余の日本訪問より生ずるならんと思わるる結果についてより十分に省みる閑暇を有したり。また余は未だ見えざる日本政府をして實際上の商議を行わしむることに直ちに成功する機会あるや否やに関し、今尚やや心中疑問を抱き居るとは云え、而も余は、結局は余

の意図する大目的が実現するならんと確信するものなり——

荒波にもまれた二週間、そしてまだ前途には気の遠くなるような航程をひかえて、鬼神のような男の心にも不安と自信のなさが垣間見えるが、動揺をふりきるように筆をすすめていく。

——予備行動として、吾が捕鯨船その他の船舶のために一つ以上の避難港及び給水港を、直ちに獲得せざるべからず。而もこれは容易に達成し得ることなり。而して若し日本政府が本島内にかかる港を許与することを拒否せば、且つ若し軍隊と流血とに頼ることなくしてはそれを獲ること能わざりせば、吾が艦隊は、先ず最初に日本南部の一、二の島内によき港を手に入れ、水と食糧とを獲るに便利なる所に集合地を確立し、而して親切温和なる待遇によって住民を懐柔し、彼等と交友を結ぶよう努力することこそ望ましく、またかく望むことは誠に当然ならん——

すでに明らかなように、「捕鯨船の避難港」を求めることは「予備行動」であつて、そんなことは「朝飯前」だと言外に語られている。「日本南部の一、二の島」とは、いうまでもなく琉球、小笠原の島々を指していることは明らかで、その一、二を占領しようとする意図は、筆が進むにつれていっそう明確になっていく。

——吾が艦隊の便利のため及び他の如何なる国民の商船に対する安全なる集合のためにも、それ等の島嶼中の主要港を占拠するは、厳密なる道徳律より見て正当とさるのみならず、厳正なる緊要律に基いてしかく考慮せらるべき処置ならんと思うなり——

いかにペリーが行動の正当性を主張しようとも、それは国際法を大きく逸脱する行為であり、独立国家の主権を無視した行動というものであることは、次のくだりで露呈する。

——余がアフリカ沿岸及びメキシコ湾（それ等の地にて多くの都市及び村々を服従せしむるは余の任務なりき）にて艦隊を指揮するに当り、余は、余の有する無限の権力を行使して、彼等を苦しむる

よりは寧ろ楽しましめ、且保護して、被^レ服^レ民^レ族の好意と信頼とを博することの困難ならざるを發見したり――

語るにおちるとは、このことにちがいない。はたして、元アフリカ・メキシコ灣艦隊司令長官は、「被^レ服^レ民^レ族」を順撫する姿勢そのままに、日本遠征に向つたのであり、「被^レ服^レ民^レ族」たる現地住民に与えて栽培させるための果実・蔬菜の園芸種子を準備してきたことを語り、ついては、その目的をよりよく達成するため、「耕耘機、鋤^{すく}及び耙^{くわ}、鋏^{はさみ}、種々の褥^{しやうも}、打穀機及び簸穀機^{はく}、殊に棉とその種子とを分つための発明品及び米をその苞^{つと}から分つための発明品の如きもの」を至急貨物船で後送してほしいと海軍長官に発注しているが、それは、とりもなおさず、極東の島国に対する提督の無知の表白にもなっている。

ここまで書いてペリーは、さすがにその帝国主義的傾斜に気づいてか、突然「オランダ人の恥ずべき陰謀の裏をかくため」合衆国の民情その他のPRにどうしても印刷機が必要なので送るようにと注文を転じている。

なぜここに、突然オランダ人の「恥ずべき陰謀」がでてきたのか、読者はとまどうが、このオランダ人とは、のちにふれる碩学フォン・シーボルトその人を指していることは明らかだ。ペリーの内包する帝国主義的姿勢を、フォン・シーボルトは、その豊かな日本理解に立って鋭く警告していたからにはかならない。

マデairaにおけるペリーがなぜかくも帝国主義的傾斜を露骨に示すようになったのか。そこはもともと、ポルトガルの植民する島であったものが、いつしかイギリスの商圈にくみいれられており、いたるところユニオン・ジャックがはためいていた。ユニオン・ジャックを仰ぎみながら、この後發資本主義国の提督は、齒^はぎしりする思いで、海軍長官宛の書簡をさらに書きついでいく。

——東洋の領域に於ける偉大なる海洋上の敵イギリスを見、彼等の軍港の絶えざる而も迅速なる増加を見る時は、吾々の方策を促進するの必要を覚らざるべからず。世界地図について見れば、大英帝国はすでに東印度及び支那の諸海湾に於て、最も重要な地点を占有し居れり。殊に支那の海湾に於て然り——

じつさい、イギリスはシンガポールでアジアの喉をおさえ、香港、ラプアン（東ボルネオ）を結ぶ三角形の頂点をもって、この海域の貿易を壟断（ろうだん）しているさまが、ペリーには齒（は）ぎしりする思いを抱かせたとしても無理はない。

——幸に日本及び太平洋上のその他の島々は、未だこの「併吞」政府に手を触れられずして残れり。而してその或るものは、合衆国にとりて重大となるべき運命を有する通商路の途中に横たわるものなれば、時を移さず十分なる数の避難港を獲得するために積極の方策を採るべきなり。されば余は大いに心せきつ、ポウアタン号及び余に送らるべき他の船舶の到着を鶴首するなり——

提督の焦燥をうつつしてか、ミシシッピー号はわずか兩三日の停泊をもってマデイラの港に錨（いかり）をあげた。マデイラ領事からのひそかな情報によれば、ブチャーチン提督に率いられたロシア艦隊はすでに十月七日クロンシュタット軍港を発つて十月三十一日にはイギリス、ポーツマス港に入ったという。「昨日ポーツマスからマデイラに來たイギリス貨物船の船長の情報では、ブチャーチンは当地でスクーナー船「ウォストーク」を購入したそうです」

新船の艤装（ぎそう）には最低二カ月かかることを、元ブルックリン海軍工廠長官ペリーは知っている。ブチャーチンのポーツマス出港は早くて新年早々だ。そして、このマデイラに着くのが一月の中旬とすれば、こちらに一カ月の利がある。とはいえ、こちらはまだ、香港であらためて艦隊を編成しなければならぬという大仕事が残っている。それに、通訳も現地で探さねばならぬ。テキはどうやらオランダ

のフォン・シーボルトの全面的な協力を得たようだ。少くともシーボルトよりもすぐれた日本専門家を、香港で求めなければならない。

ミシシッピー号はボートマスから吹いてくる焦燥の風にあおられて、ケープタウンをすぎ、モーリシャスをやりすこし、シンガポールのジョホールをこえ、一路、香港をめざして進む。

(三)

幾つかの寄港地にそれぞれ数日とどまった以外は、水平線のほか目に入ることのない百数十日の、気の狂いそうに単調な船旅だった。だが、少くとも、提督ペリーとその幕僚たちにとっては、退屈で無為な日々だったどころか、毎日が馴れぬ「読書」に追われる忙しい日々だった。なにしろ、提督はじめ、海の荒くれ男たちの誰一人として、これから赴こうとしている極東の謎の国に関して、あらかじめ一片の知識も持ちあわせてはいなかったといつてよい。

「とんでもない『親善使節』というもんじゃありませんか」

オランダ語に堪能なコンティ大尉が、フォン・シーボルトの「日本人の由来に関する論文」というパンフレットを英文に訳しながらつぶやくのを耳にした提督ペリーは、きつとなって言い放った。

「いや、そんなことはない。海の男というのはこれでいいのだ。海の男が陸で本など読んでいる閑があるものか。目的地向う船旅が、われわれの研究室であることは宿命なのだよ」

光栄あるコロンブスの末裔は、旅立ちにあたって、カリフォルニアの砂金を湯水のように投じ、アムステルダム、パリ、ロンドンの古本屋からかき集められるだけの高価な日本関係書を買入れてミシシッピー号のキャビンに積みこんできた。これが、わがヤンキーの流儀というものだ。ローリングが激しくて椅子に坐っていられないときでも、ハンモックの中で彼らは片っぱしからそれらを読破し、

海が風ぐとキャビンに集まって課題を報告しあい、日々、即席のジャパノロジストがつくりあげられていく。

「旅は長ければ長いほど、けっこうだ」

と、ペリーは幕僚たちにうそぶいてみせた。

「それにしても驚いたもんですね。マルコ・ポーロの『東方見聞録』から今日まで七百五十点もの日本関係書がヨーロッパで出ているっていうんですからね。わが合衆国では『日本近海の鯨資源』てのが一冊あっただけというのもお寒い話だ」

座長格のアダムス中佐が無然たる面持ちで言った。

「これは一八三〇年ヘーグで訳されバリで出版された日本人シ・ヘイ・ハヤシの『三国通覧図説』というのですが、シーボルトが高く評価しているように、われわれに大いに参考になるものですから、次のミーティングでリポートしましょう」

コンティ大尉のきらきら輝く眸を見つめながらも、ペリーの心はアダムス中佐の無然たる気持ちに通じていた。オランダのジャパノロジの奥行きの深さ、それはとりもなおさず、二百数十年のあいだ長崎出島をオランダが護り通してきたことから生みだされたものだ。

合衆国政府が、ペリーの日本遠征を、ヘーグの領事館を通じてオランダ政府に、一年前に通告したのも、「仁義」をきること、オランダの日本研究のお裾分けにあずからんがためだった。そのことで、邪魔者が入りこんでくるのも覚悟の上でだ。

ケムベルをはじめ、ツンベルグ、チツィング、ゾーフ、フィッシャー、メイラン等々、これらの著名なジャパノロジストたちは、すべて長崎出島にオランダ商館長として、あるいは商館付医官として赴任したキャリアの持主だが、わけても、フォン・シーボルトの体系的日本研究の業績は、「百門の